

特別支援だより No.12

令和3年7月9日（金）

特別支援教育コーディネーター 松田敦子

「普通」という表現は、子どもが理解できていない子なのかもしれない。説明しただけで、子どもが理解できず、その子に合った教え方を工夫することが大切だ。



本人の気持ち

てっかあ、いちばん後ろにならばいいんだね



教の気持ち

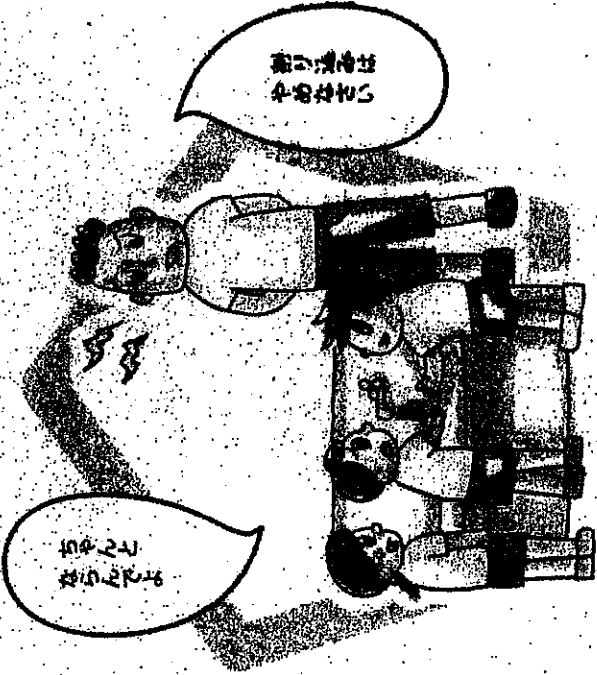
うちの子は、モデルで示したりして説明すると分かりやすいんだね

POINT

ルールにたいする理解のしかたは、タイプによって違います。見て覚えたり、聞いてイメージできる子もいるし、いっしょに行動しないと理解できない子もいます。その子に合った方法で理解もぐりかえし教えることが重要になってきます。

発達に気がなったら⑩

「普通」という様で比較してしまうと、誰の書うことも聞かず、自分勝手にわざと人を怒らせるようなことばかりをする子だと厳しく対応されがちです。



本人の気持ち

意味がわからないよ ちゃんとやってみよう



教の気持ち

わざと怒らせるようなことばかりするようには見える子は、その場のルールが理解できていないことが多いです。何回もくりかえし教えないと伝わらない子もいるし、言葉だけの説明ではうまくイメージできない子もいるのです。

POINT

Q6

学習の準備や片づけに 時間がかかりますが…

自閉症児は、授業に必要な物まで机の上に出してしまったり、必要な物を自分で探し出して授業の準備をすることができないことがあります。また、そのような準備に時間がかかることもあります。

自閉症の特性から考えてみましょう

- ① 授業に必要な道具などが取り決められている場合、一般には特に指示する必要がないと思われるような暗黙の了解事項であったり、周りを見れば分かると思われるようなものであっても、自閉症児には分からないことがあります。
- ② また、年度の最初の授業に口頭で指示しただけの場合は、その指示内容が伝わっていなかったり、毎時間指示があるものだと思っていることもあります。
- ③ 次の時間の学習内容に合わせて準備せねばならない物が探せないために、大騒ぎすることがあります。(認知上の障害のために物の識別ができない、空間の把握ができない、決められた場所がないと混乱するなどの理由が考えられます。)
- ④ 特定の物を全部そろえないと落ち着かず、ないと大騒ぎする場合は、自閉症特有のこだわりであることもあります。他の人には些細なことでも、本人にとっては非常に大切です。
- ⑤ また自閉症の子どもの一部は、片づけが下手で、机やロッカー、道具箱の中がいつもごちゃごちゃしていることがあります。何度「片づけなさい」と指示しても、うまく片づけることができません。具体的に何をどのようにしまえばよいのか分からない、自分で計画を立てたり計画を逐次実行するのが苦手、その場で判断をしながらいくつかの作業を並行して行う力が弱い、といった理由が考えられます。
- ⑥ 逆に、いつも同じ順序できっちり揃っていないと落ち着かず、始終持ち物を整理している子どももいます。また、特定の物だけはしっかり管理しているのに、他の物には目もくれないこともあります。

支援のヒント1 ● 自閉症児への指導例

小学校3年生の知的障害のある自閉症の男児。時間ごとに学習の準備物が変わるため、とまどってしまいます。また、本人が好きな物を出さないと大騒ぎをします。このような場合、支援の方法としては以下のようなことが考えられます。

- ① 準備物を写真や絵、文字などを使って目に見える方法で指示する。黒板に準備する物を書くといった配慮をする。
- ② 「鉛筆1本、消しゴム1個」とリズムカルな掛け声にして復唱することで、準備ができるようになる場合もある。
- ③ 特定の物を出さないと気が済まない子どもの場合には、理解可能ならば、「この時間は、この箱の中に入れるよ」と言って、本人の目に見える前でしまい、その時間が終わったら出して見せる。
- ④ こだわりを無理に直そうとするよりも、そのこだわりを上手に利用する方法を考える。また、こだわっている物の持ち込みは、授業や他児の邪魔にならない物に置き換えるか、徐々に妥当な範囲の物に変えていくように指導する。
- ⑤ 整理が苦手な場合は、本人の分かる方法で、何をどこへどのように置くか明確に取り決め、具体的に教える。1年生が使う道具箱のように、しまう物の形が書いてある箱を準備し、その形のところに物を合わせて収納する方法も有効。

支援のヒント2 ● 高機能自閉症・アスペルガー症候群の児童への指導例

小学校1年生の高機能自閉症の男児。自分が忘れた物を、黙って隣の子の机から取って使ってしまいます。忘れ物に気づくと、どうしてよいか分からなくなって、かんしゃくを起こすこともあります。

- ⑥ 隣の子の持ち物は、「貸してください」と言って承諾を得てから使うことを、ソーシャルスキルとして教える。
- ⑦ 持ち物の管理ができない子どもの場合には、大人が立ち会って持ち物を確認する時間を設ける。(学校と家庭との両方で行うとよい。)
- ⑧ 特に忘れやすい物(特に、鉛筆・消しゴム・三角定規など)は、教室に予備を準備して貸し出すようにする。
- ⑨ 忘れ物をしないための方法と忘れ物をした場合の対応方法について、話し合っておく。場合によっては、保護者を交えた方がよい。
- ⑩ 忘れ物をしたことで不安になっている場合は、注意するよりはまず不安を取り除かせる。(第一に、落ち着かせる。次に、話を聞く。といった配慮が必要。)